Advayavajra と Dīpaṃkaraśrījñāna

望月　海慧

はじめに

Advayavajra (974/986-1065/1077)[1] は，11 世紀のインドにおいて活躍した密教行者であり，Maitrīpa とか，Avadhūtipa としても知られている [2]．その著作集も早くから出版され [3]，その中に収められている *Tattvaratnāvalī* は，インドの後期仏教の諸学派の思想的特徴に関する貴重な情報を提示するものである [4]．これらの著作に基づく研究も近年多く発表されており [5]，彼が後期仏教に与えた影響を再認識することができる．

また，その生涯については [6]，インドにおいて著された伝記資料が現存しているものの [7]，それがチベットにおけるイメージとの間に相違が見られることが報告されている [8]．この相違は，どちらかが真実以上の脚色を含んでいることを意味するのであろうが，それだけではなく，それぞれの地域において彼がどのような人物像としてみられていたのかを示すものでもある．いずれにせよ，チベットにおいても重要な人物として認識されていたことは明らかである．

このチベットにおける彼のイメージを形成するために用いられた資料の一つとして Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記資料があり，二人の間には真言乗における師弟関係があったことが述べられている．それ故に，Advayavajra への複数の言及が見られるのだが，この言及により後のチベットにおける Advayavajra 像が形成されたこと

---

[1] Mathes 2015: 1, 注２も参照.

[2] Tucci 1930: 139.この他に，森口 1996 は，Anupamavajra との同一性を論じている．

[3] Śāstrī 1927. 密教聖典研究会 1988-1991. 彼の著作とそれらに対する研究については，Martin 2011: 392-401.

[4] Śāstrī 1927: 14-22, 宇井 1963: 1-52, Mathes 2015: 341-369.

[5] Mathes 2015, Isaacson and Sferra 2014, 松本 2016.

[6] Mathes 2015: 23-40, Isaacson and Sferra 2014: 23-40.

[7] 奥山 1991.

[8] Hadano 1986 によると，Dīpaṃkaraśrījñāna と伝記の記述と Tāranātha による記述では，異なる人物像で描かれている．このうち，後者の方がインドの伝承に近いとされていることから，前者にはチベットにおいて加えられた情報があると推定することもできる．詳細については，奥山 1991: 465-466 を参照.

Acta Tibetica et Buddhica 9: 145-166, 2016.
© Faculty of Buddhism, Minobusan University, JAPAN

も報告されている[9]．それは Advayavajra からそれほど時間を経ていない者の証言を含んでいるのかもしれないが，インド資料との相違を考えると，彼に対する一方的な見方を反映しているのかもしれない．

本稿では，Dīpaṃkaraśrījñāna 自身が師である Advayavajra に対してどのように言及しているのかを，彼の著作の中に確認する．それは，彼が実際に師をどのように認識していたのかを示しているとともに，彼が Advayavajra を思想的にどのように受容していたのかも示しているからである．また，彼の伝記資料における Advayavajra への言及も確認する．それは，後代の者に両者の関係がどのように伝えられていたのか示すものである．この二つの面から，両者の関係を考察する．

なお，本稿では Advayavajra に対して統一した呼称を用いていない．彼は，Dīpaṃkaraśrījñāna の著書では Avadhūtipa と呼ばれ，伝記資料では Maitrīpa の異名についても言及されているが，Advayavajra という呼称は見られない．以下に示すように，ここで言及される Avadhūtipa を Advayavajra とすることに対して，若干躊躇させるような問題も生じている．それ故に，Advayavajura と推定される Avadhūtipa として，文献で言及されている名称をそのまま提示している．

1. 問題の所在

Dīpaṃkaraśrījñāna と Advayavajra との関係を考察する必要性を感じたのは，前者の著作を研究している過程において，Advayavajra に関するいくつかの疑問に出会ったからである．

まず，Dīpaṃkaraśrījñāna には *Mūlāpattisaṃgraha* に対する注釈書があり，Advayavajra には *Mūlāpatti* という著作がある．前者は Aśvaghoṣa に帰されるものでもあるが，Dīpaṃkaraśrījñāna は Vāpiladatta のものと認識して可能性がある．また，この二つの十四の根本過犯に対する記述は異なっており，同一の内容ではない．Dīpaṃkaraśrījñāna は根本過犯を解説するにあたり依拠した文献は，師とされる Advayavajra のものではなく，Vāpiladatta のものであることから，Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayavajra には *Mūlāpatti* を知らなかった可能性もある．知っていたとしても，根本過犯を解説する際に，それに依拠しようと思わなかった，ということになる．

さらに，Advayavajra の著作集に収録されている *Kudṛṣṭinirghātana* についても，Dīpaṃkaraśrījñāna の著作の中で，疑問となる点がある．すなわち，Dīpaṃkaraśrījñāna の著作において同論が数度引用されているのだが，彼はそれを Nāgārjuna の著作として引用しているのである．すなわち，ここにおいても，Dīpaṃkaraśrījñāna は師

[9] Tatz 1985, 1987, 静 2015.

の著作を知らなかった可能性がある.

このことから，Dīpaṃkaraśrījñāna と Advayavajra の間には師弟関係があり，Advayavajra には多くの著作があるにもかかわらず，Dīpaṃkaraśrījñāna はそれらを読んでいなかった可能性がある．もちろん，両者が出会った年代が Dīpaṃkaraśrījñāna の若い頃であり [10], 著作活動が後年であることにもよるのであろうが，このことは両者の関係の内容を示唆するものでもある．すなわち，密教の修行などの指導を受けたのかもしれないが, 仏教の教義を教示されるようなものではなかったのかもしれない．そのような両者の関係は，彼の著作における言及からも見えてくるかもしれない.

2. Dīpaṃkaraśrījñāna の著作における言及

では、実際のところ，Dīpaṃkaraśrījñāna は自身の著作において，Advayavajra について，どのような言及をしているのであろうか．彼の著作に見られる記述を考察することにより, 彼が Advayavajra からどのような思想的影響を受けたのかを探ることができるであろう.

まず，彼の著作のうち，最も主著ともされる *Bodhipathapradīpa* に対する自注とされる *Bodhimārgadīpapañjikā* を見てみる．最初の言及は，根本偈において説かれる *Pramādibuddhatantra* に基づく梵行者に対する秘密灌頂と般若智灌頂の禁止に言及に対する解説部分に見られる [11]．まず，マントラを誤って考察することのうち，増益するものに対して，Jñānakīrti の引用に続いて言及される.

> 私の師である比丘で乞食者 Avadhūtipa も，
>
> もしも，その二つの灌頂を受けていないのならば，阿闍梨と弟子は一緒に悪趣に行くであろう.

とお説きになられている [12].

---

[10] Chattopadhyaya 1987: 73-74. ただし, *Deb ther sgong po* には,「7 年間随従した」とあるだけで, 明確な年代の記述はない．*Deb ther sngon po*, 298: A bh dhū tī pa zhes bya ba'i mchog gi grub pa brnyes pa de'i phyags phyir lo bdun 'brengs /. Roerich 1949: 242, 羽田野 1986: 71.

[11] *Bodhipathapradīpa* 257-260 (Eimer 1978: 138): dang po'i sangs rgyas rgyud chen las // rab tu 'bad pas bkag pa'i phyir // gsang b ashes rab dbang bskur ni // tshangs par spyod pas blang mi bya //. Cf. 望月 2015: 38.

[12] D. No. 3948, Khi 289b1, P. No. 5344, Ki 334b8-335a1: bdag gi bla ma dge slong bsod snyoms pa Ya ba dvī pa'i zhal nas kyang / gal te dbang bskur ba de gnyis ȣdzin par byed na / slob dpon dang slob ma dang bcas pa ngan 'gro bar 'gyur ro zhes gsungs so // Cf. 望月 2015: 152-153.

ここでは，呪詛や女性との関係を伴う秘密灌頂と般若智灌頂は，梵行者の律儀戒と矛盾するために，密教の意図を知らずに矛盾するような行為を行う者は悪趣に堕ちるとする経証として引用される文献の一つが Avadhūtipa のものとなっている．

続いて，マントラの意図を知らずに損減するものに対しても，言及される．

> 師である比丘で乞食者［の Avadhūtipa］は，
>
> それ故に，真言乗を「魔により説かれた」と軽蔑するべきではない．すべての乗を捨てていても，ここにいれば，大印契を得る．
>
> と説かれている[13]．

ここでは，Avadhūtipa の名前は出ていないものの，本論において彼は「乞食者」と呼ばれているので，Avadhūtipa への言及と見ることができる．その内容は，先ほどの増益に対して，真言乗は否定されるものでもなく，声聞乗と波羅蜜乗を越えたものとして密教の意図を理解する者には認められたものとなっている．

また，同じ根本偈の解説において，Avadhūtipa の *Sekanirdeśa* が言及される．

> *Pramādibuddhatantra* に [BPP 257]
>
> などという 12 パーダ[14]の意味について，私は，私の師となった乞食者と gSer gling pa の教誡に依存している．師が *Sekanirdeśa* に，
>
> そのうち灌頂は二種である．すなわち，在家の方向に依るものと，梵行の方向に依るものとである．在家の方向に依るものとは何かと言えば，タントラに説かれた限りのすべてである．梵行の方向に依るものは何かと言えば，その同じものから，秘密と般若智のものを除いたものである．何故にその二つが除かれるのかと言えば，次のように，仏法に依ってから生じたあらゆる善はすべて，説法が存在してから生じたものであり，説法が存在することも梵行だけに依り，二種の灌頂は梵行の反対にあるものと見られているからである．それ故に，二種の灌頂は梵行を滅するものであり，

---

[13] D. No. 3948, Khi 290a2, P. No. 5344, Ki 335b3-4: bla ma dge slong bsod snyoms pa'i zhal nas kyang / de'i phyir gsang sngags theg pa la // bdud kyis smras zhes brnyas mi bya // theg pa kun la spangs pa yang // 'di gnas phyag rgya chen po thob // ces gsungs so // Cf. 望月 2015: 154.

[14] *Bodhipathapradīpa* 257-268 (Eimer 1978: 138): dang po'i sangs rgyas rgyud chen las // rab tu 'bad pas bkag pa'i phyir // gsang b ashes rab dbang bskur ni // tshangs par spyod pas blang mi bya // gal ted bang bskur de 'dzin na // tshangs spyod dka' thub la gnas pas // bkag pa spyod par 'gyur ba'i phyir // dka' thub sdom pa de nyams te // brtul ba dag ni 'byung 'gyur zhing // de ni ngan song nges lhung bas // grub pa yang ni yod ma yin //. Cf. 望月 2015: 38.

梵行滅したら仏の教えが滅びるであろうし，それが滅びることで福徳を作ることも中断し，その根拠から無量の不善が生じるので，その二つは梵行者には捨てられるものである．

と説かれている[15].

ここでは，前出の梵行者に対する二つの灌頂の禁止に対する経証が引用されているのだが，ここで言及される「私の師となった乞食者」は，次の *Sekanirdeśa* の引用から見ても，Avadhūtipa とみなすことができる．ただし，その引用文を彼の *Sekanirdeśa* に確認することはできない[16]．このことから，Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayavajra の *Sekanirdeśa* を知ってはいたものの，その内容を正確に把握していなかったのか，或は他の文献と誤解していた可能性がある．

さらに，続く根本偈[17]において，すべてのタントラを聞き，解説し，護摩や儀軌を行った者が第四灌頂を受けることに過失はないことを述べる偈頌の阿闍梨灌頂に対する解説において，Avadhūtipa が言及されている．

この意味は，師である比丘の乞食者 Avadhūtipa がお説きになられている．すなわち，

「そのようならば，梵行者が大乗の者であっても，大乗の部分をもたないことになってしまう」と言うのならば，彼はこれを確かに誤解して行っている．誰であれ瓶と阿闍梨［の灌頂］と，許可を得たタントラなどの成就と解説と聞くことと考察には灌頂のための部分がそなえられている．そのようならば，「在家の者にも秘密と智慧の灌頂は必要がないことになってしまう」と言うのならば，それは不必要なものでもあり，その反対でも

---

[15] D. No. 3948, Khi 290a7-b4, P. No. 5344, Ki 336a3-8: de la dbang ni rnam pa gnyis te / khyim pa'i phyogs la brten pa dang / tshangs par spyod pa'i phyogs la brten pa'o // khyim pa'i phyogs la brten pa gang zhe na / ji snyed rgyud las gsungs pa thams cad do // tshangs par spyod pa'i phyogs la brten pa gang zhe na / de dag nyid las gsang ba dang shes rab ye shes spangs pa'o // ci'i phyir de gnyis spangs she na / 'di ltar sangs rgyas kyi chos la brten nas dge ba ji snyed cig 'byung ba de dag thams cad ni bstan pa gnas pa las byung ba yin la / bstan pa gnas pa yang tshangs par spyod pa kho na la ltos shing / dbang bskur ba gnyis ni tshangs par spyod pa'i mi mthun pa'i gnas su mthong ba'i phyir ro // de bas na dbang bskur ba gnyis ni tshangs par spyod pa zad par byed pa yin la / tshangs par spyod pa zad na sangs rgyas kyi bstan pa nub par 'gyur zhing / de nub pas bsod nams mngon par 'du bya ba rnams rgyun chad par 'gyur la / gzhi de las dge ba ma yin pa dpag tu med pa 'byung ba'i phyir de gnyis tshangs par spyod pa rnams la spangs so zhes gsungs so //. Cf. 望月 2015: 155.

[16] Śāstrī 1927: 28-31, 密教聖典研究会 1991: 48-66, Isaacson and Sferra 2014.

[17] *Bodhipathapradīpa* 269-272 (Eimer 1978: 138): rgyud kun ngan dang 'chad pa dang // sbyin sreg mchod sbyin sogs byed pa // slob dpon dbang bskur rnyed 'gyur zhing // de nyid rig la nyes med //. Cf. 望月 2015: 38.

ある．

などと詳しくお説きになられている[18]．

この引用についても，その典拠の確認はできていないのだが，Dīpaṃkaraśrījñāna は四灌頂をめぐる議論において Avadhūtipa に言及していることがわかる．このことは *Bodhipathapradīpa* のこのコンテキストが Avadhūtipa に教示された教えに基づいていることがわかる．また，典拠の確認ができないことは，逆に，この四灌頂の在り方が Avadhūtipa から直接にを伝えられたものである可能性を示している．

Dīpaṃkaraśrījñāna の著作の中で，*Bodhimārgadīpapañjikā* に次いで長いものが，*Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa* である．本論では，菩提心に対する解説が前半の主題となっており，それに続いて菩薩たる者の在り方を説明する箇所で，最初の Avadhūtipa に対する言及を見ることができる．

尊師 Avadhūtipa は，

自分の過失を考察するのは鋭い目の者のように，他人の過失を考察するのは盲目のように．正直で我慢がなく，常に空性を修習するべきである．

直接または間接に悲心により，自らと他者を交換するべきである．何故ならば，自分より衆生を慈しむためである．

と師 Nāropa が説かれている．

と言い，菩薩は自分より他者を慈しむべきなので，自らと他者を交換するべきである．慈愛と悲心の菩提心はマントラの主題でもある．十四根本過犯に，

衆生たちに対する慈愛を捨てることが第四である，と勝者は説かれている．

法の根本は菩提心であり，それを捨てることが第五である[19]．

と説かれている．他者を責めないで，他者の罪過を縁とせずに，百由旬にわたっ

---

[18] D. No. 3948, Khi 290b6-291a2, P. No. 5344, Ki 336b3-6: ʼdiʼi don bla ma dge slong bsod snyoms pa Ya ba dwī pas gsungs te / ʼdi skad du de lta yin na tshangs par spyod pa rnams ni theg pa chen poʼi yang theg pa chen poʼi skal ba can ma yin par ʼgyur ro zhe na / de ni ʼdir nges par ʼkhrul par spyad par bya ste / gang gis bum pa dang / slob dpon dang rjes su gnang ba thob pa nyid kyi rgyud la sogs pa bsgrub pa dang / bshad pa dang mnyan pa dang blta ba la dbang bskur baʼi phyir skal ba can yin no // de lta na khyim pa dag la yang gsang ba dang / shes rab kyi dbang dgos pa med par ʼgyur ro zhe na / de mi dgos pa yang yin la / de las bzlog pa yang yin no zhes bya ba la sogs pa rgyas par gsungs so //. Cf. 望月 2015: 156.

[19] *Mūlāpattisaṃgraha* 4. 頼富 1990: 452-453: *maitrītyagena sattveṣu caturhī kathitā jinaiḥ / bodhicittaṃ dharmamūlaṃ tasya tyāgāc ca pañcamī /.*

て行くべきである[20].

ここでは，Avadhūtipa の言葉が引用されているものの，実際には，彼が師である Nāropa から受けた教えである．その内容は，菩薩であるものは衆生に対する慈愛のために自他を交換すべきであるというものであるが，その典拠の確認はできていない．ここでの引用が Nāropa の典籍から引用ではなく，それを Avadhūtipa の言葉として引用していることから，Dīpaṃkaraśrījñāna は Nāropa の典籍を確認していなかったことがわかる．また，Avadhūtipa に対して「師(bla ma)」と呼んでいるいることから，Dīpaṃkaraśrījñāna は彼を自分の師と認識しており，Avadhūtipa に対して Nāropa を「師」と呼ばせていることから，Dīpaṃkaraśrījñāna は両者の師弟関係も認識していたことがわかる．さらに，この言及の直後に *Mūlāpattisaṃgraha* の第 4 偈が引用されている．Advayavajra にも *Mūlāpatti* という著作があるものの[21]，ここで引用されているものは Aśvaghoṣa に帰されているものである．ただし，Dīpaṃkaraśrījñāna は *Mūlāpattisaṃgraha* に対する注釈書を著しているものの，その著者を Aśvaghoṣa ではなく，Vāpiladatta と認識していた可能性がある[22]．少なくとも，ここにおいて Avadhūtipa への言及の直後に *Mūlāpattisaṃgraha* が引用されているものの，Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayavajra の *Mūlāpatti* を知らなかった可能性がある．

Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa では，所化の相違に応じて，仏の身体と智慧と功徳の多様性を解説する箇所において再び Avadhūtipa が言及される．

師 Avadhūtipa と，師 Tāmradvīpa が，

知恵は法界と異ならず，法界において自ら生じる智慧と名づけられる．不可思議で，言語の戯論を離れており，その調伏されるものの本

---

[20] D. 3930, Ki 108b6-109a2, P. No. 5325, A 121a26-b2: bla ma rje btsun A va dhū tī pa'i zhal nas / rang skyon rtog la mig rnon bzhin // gzhan skyon rtog la long ba bzhin // drang dang nga rgyal med pa dang // rtag tu stong nyid bsgom par bya // snying rje dngos dang brgyud pa yis // bdag dang gzhan rnams brje bar bya // gang phyir rang bas sems can gces // zhes bla ma Na ro pa'i zhal nas gsungs skad / byang chub sems dpa' rang bas gzhan gces par bya dgos pas bdag dang gzhan brje bar bya'o // byams pa dang snying rje byang chub kyi sems ni gsang sngags kyi yang gnad yin te / *rTsa ba'i ltung ba bcu bzhi pa* las / sems can rnams la byams pa spong // bzhi pa yin par rgyal bas gsungs // chos kyi rtsa ba byang chub sems // de spong ba ni lnga ba yin // zhes gsungs so //. Cf. 宮崎 2007: 99-100, 望月 2016: 182.

[21] *Mūlāpatti* 2d-3a (Śāstrī 1927: 13, 密教聖典研究会 1988: 42, Mathes 2015: 337): mahāmaitrīvivarjane // 2 // bodhicittaparityāge.

[22] 望月 2013. 拙稿では，「Bavideva と認識していた」としたが，Szántó 2013 によりサンスクリット写本に Vāpiladatta とあることがわかた．このことをご教示いただいた，Péter Dániel Szántó 先生に対してこの場を借りて御礼申し上げる．

質を五種とお説きになられている．

と軌範師 Nāgārjuna は説かれている．

と説かれている．そのように，十力などと，三神通と，二十五の所作と，三十二の所作とが，調伏されるべきもののいずれかの本質に現れる．それ故に，軌範師自身が，

守護者には，心がなく，分別が動くことがなくても，あなた自身は自然に衆生に対して仏の所作をなすであろう[23].

また，

一切の分別は，大風による如意樹のように，動かないけれども，それでも一切の衆生の想いを円満にされている[24].

また，

守護者よ，あなたに衆生の想が作用することは全くなくても，苦をもつ衆生に対しては悲心という利益をお与えになられているのが，あなたである[25].

また，

利他の円満が結果の最高であると認められる．仏性などのそれ以外のものなどは付随的なものと認められる[26].

と説かれている[27].

---

[23] *Niraupamyastava* 24 (Tucci 1932: 320, 津田 2006: 93): na tu ’sti manyanā nātha na vikalpo na ceñjanā / anābhogena te loke buddhakṛtyaṃ pravartate //. Cf. *Kudṛṣṭinirghātana* 2 (密教聖典研究会 1988: 10, Mathes 2015: 324): na te ’sti manyanā nātha na vikalpo na veñjanā / anābhogena te loke buddhakṛtyaṃ pravartate //.

[24] *Kudṛṣṭinirghātana* 4 (Śāstrī 1927: 1, 密教聖典研究会 1988: 10, Mathes 2015: 325): cintāmaṇir ivākampyaḥ sarvasaṃkalpavāyubhiḥ / thathāpi sarvasattvānām aśeṣāśāprapūrakaḥ //.

[25] *Niraupamyastava* 9 (Tucci 1932: 314, 津田 2006: 86): sattvasaṃjñā ca te nātha sarvathā na pravartate / duḥkhārteṣu ca sattveṣu tvam atīva kṛpātmakaḥ //.

[26] *Kudṛṣṭinirghātana* 3 (Śāstrī 1927: 1, 密教聖典研究会 1988: 10, Mathes 2015: 324): parārthasaṃpad buddhānāṃ phalaṃ mukhyatamaṃ matam / buddhatvādi yad anyat tu tādarthyāt phalam iṣyate //.

[27] D. 3930, Ki 111b2-6, P. No. 5325, A 124b4-125a2: bla ma a va dhū tī pa dang / bla ma Tā mra dvī pa’i zhal nas / ye shes chos kyi dbyings dang tha mi dad // chos kyi dbyings la rang ’byung ye shes btags // bsam du med cing tshig gi spros dang bral // gdul bya’i ngo gang de nyid rnam lngar gsungs // zhes slob dpon Klu sgrub kyis gsungs zhes gsungs so // de bzhin du stobs bcu la sogs pa dang / cho ’phrul gsum dang / phrin las nyi shu rtsa lnga dang / phrin las sum cu rtsa gnyis rnams gdul bya’i ngo gang la snang ngo // de bas na slob dpon gyi zhal snga nas / mgon po sems pa mi mnga’ zhing // rnam rtog g-yo ba mi mnga' yang // khyod nyid ngang gis sems can la // sangs rgyas phrin las mdzad par 'gyur // yang / rnam rtog rlung dmar thams cad kyis // dpag bsam shing ltar mi bskyod kyang // de yang sems can thams cad kyi // bsam pa yongs su rdzogs par mdzad // yang / mgon khyod sems can ’du shes kyi // ’jug pa kun du mi mnga' yang // sdug bsngal can gyi sems can la // snying rje phan gtong mdzad pa khyod // yang / gzhan don phung sum tshogs pa ni // ’bras bu’i gtso bo yin par bzhed // sangs rgyas nyid sogs de las gzhan // de dag zhar la ’byung bar bzhed // ces gsungs so //. Cf. 宮崎 2007:

ここでも，Avadhūtipa が言及されているものの，引用されるのは Nāgārjuna の言葉であり, それを師である Avadhūtipa からだけではなく, 同じく師である Tāmradvīpa からも聞いたという形になっている．ただし，その典拠が Nāgārjuna のものに確認できていないことから，先ほどの Nāropa の引用と同じように，Dīpaṃkaraśrījñāna 自身も Nāgārjuna の著書に確認できなかったことから，師から聞いた形で引用したのかもしれない．この言及に続き，「軌範師(slob dpon)」の言葉が引用されているのだが，*Niraupamyastava* であることから，軌範師は Nāgārjuna である．ただし，ここではそれと並んで *Kudṛṣṭinirghātana* も引用されているのだが，この著作は，Advayavajra の著作集にも収録されている．すなわち，Dīpaṃkaraśrījñāna は同論を Advayavajra の著作として認識していなかった可能性がある．

Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa では，さらに Nāgārjuna に対する解説の最後において，その誓願身が極楽にいることを説明する根拠として Avadhūtipa の言葉が引用されている．

師である尊者 Avadhūtipa が，

> 私の師で偉大な尊者で瑜伽自在の Avadhūtipa は，神通で過去にいたようにお顔を見て，法を聞いている．時に，シュリーパルヴァタで見ておられ，聖者の弟子である尊者 Nāgabodhi に現在の吉祥なる Śabarīpa として知られている者も常に法を聞いている [28].

と師である Avadhūtipa が説かれている [29].

その典拠を確認できていないのだが, Avadhūtipa の言葉の中に自身の師として同名の Avadhūtipa が再び出ている．この二人の Avadhūtipa に対して Dīpaṃkaraśrījñāna がどのように認識していたのかは明らかではないが，彼が瞑想修行などの神通力により Nāgārjuna に会っていたと伝えられている．すなわち, Avadhūtipa を Nāgārjuna の相承者と認識しているとともに, ここでの Nāgārjuna は Nāgabodhi との関係から，密教者としての Nāgārjuna であり, Dīpaṃkaraśrījñāna もその相承を継承しているこ

105-106, 望月 2016: 188-189.

[28] 現時点で典拠の確認はできていない。

[29] D. 3930, Ki 115b6-116a1, P. No. 5325, A 131a6-8: bla ma rje btsun A ba dhū tī pa'i zhal nas / nga'i bla ma rje btsun chen po rnal 'byor gyi dbang phyug A ba dhū tī pa mngon par shes pas sngon ji ltar mnga' ba bzhin du / zhal gzigs shing chos gsan / res dpal gyi ri la gzigs shing bzhugs te / 'phags pa'i slob ma rje btsun Klu'i byang chub dus da lta dpal Sha ba ri par grags pa yang dus rtag tu chos gsan pa yin no // zhes bla ma A ba dhū tīs gsungs so //. Cf. 宮崎 2007: 117, 望月 2016: 196.

とが示されている．

Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa では，末尾において *Bodhimārgadīpapañjikā* と同様に，秘密灌頂と般若智灌頂の問題が言及されており，そこにおいても Avadhūtipa の引用が見られる．

> 私の師であるヤヴァドヴィーパの乞食 Avadhūtipa は，
>
> 二乗を捨てていても，ここにいて，大印契を得る．それ故に，この真言乗を，どんな賢者が行をなさないであろうか．
>
> と説かれている[30]．

ただし，この引用は文章に相違は見られるものの，*Bodhimārgadīpapañjikā* における引用と同じものである．

Avadhūtipa に対する言及は，彼の小部作品においても見ることができる．その中でも，*Ekasmṛtyupadeśa* には，先ほどと同じように，Nāgārjuna と関連して言及されている．まず，同論の帰敬偈において彼の名前を見ることができる[31]．

> 一切智者に敬礼して，聖 Nāgārjuna に礼拝してか Avadhūtipa に［礼拝する］．
>
> 速やかに入る解説を書く[32]．

同論は，大灌頂を得ていない者に対して方便と智慧の所作を示すものであり，密教的な内容を伴うものである．その冒頭において，Nāgārjuna と Avadhūtipa が併記されているのだが，ここでの Nāgārjuna は，*Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa* のものと同じように，中観論者だけではなく密教者行者としての立場を伴うものである．そこで，Dīpaṃkaraśrījñāna の師である Avadhūtipa の名前が併記されていることは，Dīpaṃkaraśrījñāna の Nāgārjuna 観は Avadhūtipa のものが影響していることを示している．すなわち，Dīpaṃkaraśrījñāna が密教行者としての Nāgārjuna を受け

---

[30] D. 3930, Ki 116a9-7, P. No. 5325, A 131b8-132a2: bdag gi bla ma Ya ba dwī pa bsod snyoms A wa dhū tī'i zhal nas / theg pa gnyis pos spangs pa yang // 'dir zhugs phyag rgya chen po 'thob // de'i phyir gsang sngags theg pa 'dir // mkhas pa su zhig spyod mi byed // ces gsungs so //. Cf. 宮崎 2007: 118, 望月 2016: 196-197.

[31] ただし，この帰敬偈は必ずしも著者によるものとは限らないので，後の編者や翻訳者により付された可能性も排除できない．

[32] D. 3928, Ki 94b4-5, P. No. 5323, A 104a8: bcom ldan 'das 'jig rten dbang phyug la phyag 'tshal lo // thams cad mkhyen la gus btud de // 'phags pa Klu sgrub phyag 'tshal nas // a ba dhū tī bdag gis ni // cig car 'jug pa'i man ngag bri //. Cf. Mochizuki 2015: 214, 望月 2016: 258.

入れている根拠に Avadhūtipa の存在がある可能性もある.

Ekasmṛtyupadeśa では, さらに, その末尾において Nāgārjuna の *Bodhicittavivaraṇa* に続いて次の言葉が引用されている.

> 次のように聖Nāgārjunaは,
>
> 　他者の利益の円満は結果の最勝と認められる. 仏性などのそれ以外のものはそれらの利益の結果と認められる[33].
>
> とお説きになられている. 真実性に入る解説も心にとどめるべきである[34].

この引用は, 前述の *Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa* においても引用されるように *Kudṛṣṭinirghātana* からのものである. 先ほどは「軌範師」としか述べられていなかったが, ここでは明確に Nāgārjuna とされていることから, Dīpaṃkaraśrījñāna は *Kudṛṣṭinirghātana* の著者を Nāgārjuna と認識しており, Advayavajra のものと認識していなかったことになる. ただし, 本論の冒頭では Avadhūtipa の名前が併記されていることから, 両者の関係に基づいて本論が著されたことは明らかである.

Dīpaṃkaraśrījñāna には, 真言乗の著作も多くあるが, いずれもが小部作品であり, 典籍の引用や論師への言及はあまり見られない. その中で, *Vajrāsanavajragīti* において, 自分自身を他所に見る迷乱を光明による浄化する修習の解説において, Avadhūtipa への言及を見ることができる.

> 世間の戯論を金剛が倒してから, 恐怖の認識と羞恥心は, Avadhūtipa が捨てている[35].

同論には, Dīpaṃkaraśrījñāna 自身による注釈書も存在しており, それにより補うと, 一切の器世間を光明により溶してから, 風と心をともなうものを中央脈管に入れることであり, この修習が Avadhūtipa から教示されたものとなる[36]. ただし,

---

[33] *Kudṛṣṭinirghātana* 3.

[34] D. 3928, Ki 95a6-7, P. No. 5323, A 105a8-6: ji skad du / ’phags pa Klu sgrub kyi zhal snga nas / gzhan don phung sum tshogs pa ni // ’bras bu’i gtso bo yin par ’dod // sangs rgyas nyid sogs de las gzhan // de dag don gyi ’bras bur ’dod // ces gsungs so //. Cf. Mochizuki 2015: 215-216, 望月 2016: 259-260.

[35] D. No. 1494, Zha 209a2-3, P. No. 2209, Pa 211b6: ’jig rten spros pa gnas pa rdo rje phab nas ni // ’jigs ’dzin ngo tsha a wa dhū tis spongs //. 望月 2008: 167, 望月 2016: 628.

[36] D. No. 1495, Zha 214ba3-4, P. No. 2210, Pa 218a4-5: ’od gsal du ji ltar bsgom zhe na / ’jig rten spros la rdo rje phab nas ni // zhes bya ba ni snod bcud thams cad ’od gsal du bzhu la tshul bsdu’o // ’jig ’dzin ngo tsa A wa dhū īs spongs zhes bya ba ni rlung sems dang bcas pa rtsa dbu mar bcug

この *Vajrāsanavajragīti* については，Deb ther sgong po において，Avadhūtipa に 7 年随従した記述に続いて，多くの金剛歌を聴聞し，その内容が *Vajrāsanavajragīti* となったことが記されている [37]．このことから，この言及だけでなく，同論全体が Avadhūtipa から受けた教えを示している可能性がある．

その他にも，Nāgārjuna に帰される *Sūtrasamuccaya* に対する解説書である *Sūtrasamuccayasañcayārtha* のコロフォンにも Avadhūtipa に対する言及を見ることができる．

> 比丘 Tshul khrims rgyal ba が広げることを望んでから，チベットの師たちは我慢と羨望が大きいので我慢の風船に功徳の水は着かない．それに似たケル寺の走廊の僧侶である私が誓願して，説をともなって、与えてくれた．尊者の師である Avadhūtipa による無住所の見解と，最後の業の発心の儀軌と，*Sūtrasamuccaya* の意味の概説をなしたこの三つを一度に与えて下さっている [38]．

ただし，この文章は，著作の経緯を後代の者が記したものであることから，Dīpaṃkaraśrījñāna 自身の言葉ではない．この「無住所の見解」が Advayavajra の *Apratiṣṭhānaprakāśa* のことであるとするならば，それは伝承情報にすぎないが，Dīpaṃkaraśrījñāna の著作の中に Advayavajra の著書への言及を見ることができる．少なくとも，この文章を書いた者の認識では，Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayavajra の著作の一つをチベットに伝えていた可能性がある．

3. 『アティシャ伝(*rNam thar rgyas pa*)』における言及

次に，Dīpaṃkaraśrījñāna と Advayavajra の関係がチベットにおいてどのように伝えられていたのかを示すために，彼の伝記における記述を見てみる．最初の言及は，Dīpaṃkaraśrījñāna の相承を述べる箇所において，大乗の波羅蜜乗のうち，見解の相承の中に見ることができる．

---

la ’od gsal bsgom pa’o //. 望月 2008: 182，望月 2016: 639.

[37] Deb ther sngon po, 298: u rgyan gyi yul du mkha’ ’gro ma rnams dang lhan cig tshogs la spyod pa na / rdo rje’i glu mang po gsan te / dus phyis yi ger btab pa’i *rDo rje’i glu* de la sogs pa lags /. Roerich 1949: 242，羽田野 1986: 71.

[38] P. No. 5333, A 397b4-6: dge slong Tshul khrims rgyal bas spel bar ’dod pa las bod kyi ston pa rnams ni nga rgyal dang phrag dog che bas nga rgyal gyi sgang bu la yon tan gyi chu ma chags so // de ’dra lha kang ke ru’i khyams smad kyi ban de bdag gis zhus te gdams ngag dang bcas te gnang ngo // jo bo’i bla ma A wa dhū ti pas rab tu mi gnas pa’i lta ba dang / las mtha’ sems bskyed pa’i cho ga dang / mdo kun las btus pa’i don man ngag tu byas pa ’di gsum stabs gcig tu gnang ba lags so // //. Cf. 望月 2016: 452. ただし，この文章は，デルゲ版とチョネ版には欠けている。

見解の相承について，軌範師 Nāgārjuna が第一の諦を見られており，ある者は第五地を得てから第六地を修行したと認めており，世尊が多くの経典で授記していると説かれている．Candrakīrti は幻のような三昧を体験している．Vidyākokila は，この説かれた法と論理がある認識根拠に知らないものはないと説かれている．大 Avadhūtipa は所作を所依とする善知識としておられ，Ku su lu che ba とも知られ，大印契の成就を獲得したと説かれている．小 Avadhūtipa はこの所作も所依として出家し，大印契の成就を獲得しており，Ku su lu chung ba とも知られている．Atiśa である．これらの六名の相承は清浄な相承で，道理の意味を退くことなく見られており，これらの功徳のすべても，尊者は持っている [39].

ここでは，大小の二人の Avadhūtipa が言及されている．彼らの同定をしなければならないが，このいずれかが Advayavajra にあたると考えられる．また，顕教である波羅蜜乗の相承として言及されているので，Ratnabhadra は Avadhūtipa から見解 (lta ba) の教えも受けていたとされている．

また，波羅蜜乗の行の相承を，Maitreya の相承と Mañjuśrī の相承に分類し，前者において Avadhūtipa が言及される．

Vairocanabhadra も成就のみを喜び，聖者の法をすべて具えている．Haribhadra も聖教と論理を説く者たちの中で獅子のようになられ，文法と因明のすべての意味を知る論理の源となったパンディタである．Ratnabhadra も，一切の慧の垢を離れたパンディタで，一切法を虚空のように理解し，Avadhūtipa の行を量として持っている．Guṇamitra とも言われる者は，Ratnasena でもある．gSer gling pa は無量の成就の解説を持ち，成就を実践し，無量の功徳を持ち，方便と智慧の両者に精通し，尊者 Atiśa の無量の功徳の物

[39] Eimer 1979, 2. Teil, p. 16: lta ba'i brgyud pa ni / slob dpon klu sgrub kyis dang po'i bden pa gzigs pa yin / kha cig sa lnga pa thob nas drug pa sbyong bar ʼdod / bcom ldan ʼdas kyis mdo du ma nas lung bstan pa yin gsung / zla ba grags pas sgyu ma lta bu'i ting nge ʼdzin mngon sum du byas pa yin / rig pa'i khu byug gis bstan pa ʼdi'i chos dang rig pa yod tshad la mi mkhyen pa med pa yin gsung / a ba dhū tī pa chen po bya bar ten dge bsnyen du zhugs pa / ku su lu che ba yang zer / phyag rgya chen po'i dngos grub brnyes pa yin gsung / a ba dhū tī pa chung ba bya ba ʼdi yang rten rab tu byung ba phyag rgya chen po'i dngos grub brnyes pa yin ku su lu chung ba yang zer / a ti sha / brgyud pa drug po ʼdi lta ba rnam par dag pa'i brgyud pa gnas lugs kyi don phyin ci ma log par gzigs pa / ʼdi rnams kyi yon tan ma lus pa yang jo bo la mngaʼ ba yin te /.

語を次に広く生じる[40].

ここでの Maitreya の相承は，ここで言及される論師からアビサマヤの相承を意味している．ただし，Avadhūtipa は Ratnabhadra との関係で言及されているのに対して，Ratnabhadra は gSer gling pa から教えを受けているので，両者の直接の関係はないことになる．

さらに，宗義の相承において Avadhūtipa が言及される．

> 宗義の相承は，Mañjuśrī 自身に会われた Avadhūtipa，Dīpaṃkarabhadra，Śākyamitra，Ri bo bzang po であり，この両者はヴァジュラ・ダーキニーの教義を保持していた. 乞食者である方と, Vidyākokila, Sa ’gegs pa, Ratnākaraśānti, 尊者で，相承したこれら９名は，宗義を知っており，これらのすべての功徳も尊者にある[41].

ここでの宗義(grub mtha’)は，Mañjuśrī に関わるものと理解することができるが，Dīpaṃkaraśrījñāna の直前は Ratnākaraśānti であり, Avadhūtipa から直接に教えを受けたものではない．また，「乞食者(bSod snyoms pa’i zhabs)」については，前出の *Bodhimārgadīpapañjikā* では Avadhūtipa にも付されていることから，こちらも Avadhūtipa と見なすことができるが，その場合は二人の Avadhūtipa にもなる．

さらに，最後の種々なる教誡の相承においても，Avadhūtipa が言及される．

> 種々なる教誡の相承は，軌範師聖 Nāgārjuna，Nāgabodhi，行者 Sam ga pa，Ratnākaraśānti, 尊者である. また, いくつかの教授は, Nāgārjuna, Candrakīrti,

---

[40] Eimer 1979, 2. Teil, p. 16: mkhan po yang dag rnam snang mdzad bzang po yang sgrub pa kho na la mnyes pa / (bai ro tsa na’i sde /) ’phags pa’i chos ma lus pa dang ldan pa’o // seng bzang po yang lung rig smra ba rnams kyi nang na seng gel tar gyur pa / (bhu khra ta ra) sgra tshad kun gyi don la mkhas pa rig pa’i ’byung gnas su gyur pa’i pa ṇḍi ta’o // rin cen bzang po yang blo’i dri ma thams cad dang bral ba’i pa ṇḍi ta / chos thams cad nam mkha’ lta bur thugs su chud pa a ba dhū tī pa’i spyod pa tshad du skyel ba’o // gun a mi tra yang zer yon tan bsnyen rad pa pha la rin cen sde / (rad nab a tra) gser gling pa ni – sgrub pa’i man ngag dpag tu med pa dang ldan pa / sgrub pa thugs nyams su bzhes pa / yon tan dpag tu med pa dang ldan pa / thabs shes rab gnyis la mnga’ brnyes pa / khyad par du yang kun rdzob byang chub sems la blo sbyong ba jo bo a ti sha’i yon tan dpag tu med pa’i lo rgyus ’og tu rgyas ’byung ngo //.

[41] Eimer 1979, 2. Teil, p. 30: grub mtha’i brgyud pa la ’jam dpal dngos zhal gzigs pa’i a ba dhū tī pa / mar me mdzad bzang po / shā kya bshes gnyen / ri bo bzang po / de gnyis kyis kyang rdo rje mkha’ ’gro ma dngos la gsan / de nas slob dpon bsod snyoms pa’i zhabs / khu byug zhabs / sa ’gegs pa’i zhabs / ra tna a ka ra / sha nti pa / jo bo nyid / brgyud pa dgu po ’di rnams grub mtha’ la mkhas pa yin te / ’di rnams kyi yon tan ma lus pa yang jo bo la mnga’ ba yin /.

Vidyākokila，Avadhūtipa，gSer gling pa，尊者である．さらにまた，いくつかの教授は, Nāgārjuna, Āryadeva, Candrakīrti, Telayogin, Sthiramati, Jñānabodhi, 尊者である．これらの師たちの教授はすべて尊者にある [42].

ここでは，相承の最後に種々なる相承として Nāgārjuna からの三種の相承が並べられており, その第二に Avadhūtipa が言及されている. この相承の内容は不明だが, Dīpaṃkaraśrījñāna の師とされる gSer gling pa と併記されているものは，前述の *Bodhimārgadīpapañjikā* における *Sekanirdeśa* に言及箇所にも見ることができる.

また，相承の末尾に師である gSer gling pa の紹介がなされており，その中にも Advayavajra への言及が見られる.

gSer gling pa は Dharmakīrti であり，慈愛が大きかったので Maitrīpa とも呼ばれた. 三名の Maitrīpa がおり, 王子である Maitrīpa は尊者 Maitreya であり, 君主 Maitrīpa は，尊者がヴィクラマシーラから追放した者であり，このスマトラの Maitrīpa はこれをなした者である．彼は，名前の意味を具えているので, 法に依る名称で島の黄金を満たした [43].

ここでは，gSer gling pa の異名である Maitrīpa に対して，二人の同名がいたことが述べられている．すなわち，gSer gling pa と Dīpaṃkaraśrījñāna の関係を示すコンテキストではないのだが，この第二の Maitrīpa が Advayavajra とされ，Dīpaṃkaraśrījñāna が僧院から追放された物語とされている.

以上は，Dīpaṃkaraśrījñāna の相承についての記述における言及であるが，その他に Dīpaṃkaraśrījñāna の生涯を述べる箇所においても Avadhūtipa が言及される.

成就を獲得した三人の師がおり，Ku su lu chung ba と Yamāriyogin と

[42] Eimer 1979, 2. Teil, p. 32: gdams pa sna tshogs pa'i brgyud pa ni / slob dpon 'phags pa klu sgrub / nā ga bo dhi / spyod pa pa / sam ga pa / ra tna a ka ra sha nti pa / jo bo nyid / (lugs gsum la gsum ka drug drug yod) yang gdams pa shas gcig la / nā ga dzu na / zla bag rags pa / rig pa'i khu byug / a ba dhū tī pa / gser gling pa / jo bo nyid / yang gdams pa zhas gcig la / nā ga dzu na / ā rya de ba / tsa ndra kī rti / ti la yo gi / ma ti sthi ra dznyā nab o dhi / jo bo nyid / bla ma 'di rnams kyi gdams pa ma lus pa yang jo bo la mnga' ba yin te /.

[43] Eimer 1979, 2. Teil, p. 39: gser gling pa chos kyi grags pa byams pa che bas mai tri pa yang zer / mai tri pa gsum byung ba la / rgyal sras mai tri pa ni rje btsun byams pa / mnga' bdag mai tri pa ni jo bos bi kra ma nas btong pa de yin / 'di gser gling mai tri bya ba de yin gsung / de ni mtshan don dang ldan pa yin pas chos la brten pa'i grags pas ni 'dzam bu'i gling khyab pa'o //. Cf. 静 2015: 144.

Avadhūtipa の三名に法を聞いた[44].

ここでは，Dīpaṃkaraśrījñāna が密教の灌頂を受けた後に，出会った三名の師の一人として言及されている．この記述から，前述の二人の Avadhūtipa のうち，大 Avadhūtipa が Advayavajra のことであることがわかる．この記述に続いて，二人の関係が述べられている．

> 大 Avadhūtipa に 7 年仕えたという主張と，12 年仕えたという主張もあり，ゲシェである翻訳官は 9 年仕えたと説いている．ゲシェである Lag sor pa は，意味に矛盾はないと説かれている．中観の恩恵を彼に受けた[45].

ここでは，Dīpaṃkaraśrījñāna が Avadhūtipa に仕えた年数に異説があることが述べられている．このいずれの年数にせよ，長い年月にわたり仕えていたことがわかる．また，中観の教えを受けたことが言及されており，Dīpaṃkaraśrījñāna が中観の学説に興味をもつきっかけとなったことが Avadhūtipa によることを推定することができる．

Dīpaṃkaraśrījñāna の伝記には，Avadhūtipa の実際の行動に関する言及も見ることができる．彼がヴィクラマシーラ僧院に入ってから戒法師を追い出してから罪過が集まって来たことを述べた箇所において，次の実例が挿入されている．

> 特に，君主 Maitrīpa がそこにおられたので，その方の見解と行と結果の三つに対して，師 Śāntipa が過失を述べてから門の上に書いた．Maitrīpa も *Kudṛṣṭinirghāta*[46]と *Svapnanirdeśa*[47]と *Māyānirkuti*[48]を著してから過失を取り除いた．Maitrīpa は，ヨーギニーに対して三摩耶をなすのでヨーギニーの聖物の酒を隠しており，ある尊者が見てからサンガに報告し，僧たちは「違反者がいるなら追放しなければならない」と言うと，「追放して退去を命じなくても損

---

[44] Eimer 1979, 2. Teil, p. 78: dngos grub brnyes pa'i bla ma gsum mnga' ba la / ku su lu chung ba / gshin rje gshed kyi rnal 'byol pa / a ba dhū tī pa gsum gyi chos gzigs / de gsum gyi mtshan tsam yang mi brjod par / sha nti pa chen po 'di skad gsung / mi tra chen po 'di skad gsung / bya ba 'ga' re yang gsung /. Cf. 望月 2014: 860-861, 静 2015: 144, Mochizuki 2016: 64.

[45] Eimer 1979, 2. Teil, p. 80: a ba dhū tī pa chen po la lo bdun bsten par yang 'dod / lo bcu gnyis su bsten par yang 'dod pa yod pa la / dge bshes lag sor pa'i zhal nas don la 'gal ba mi 'dug gsung / dbu ma'i bka' drin phal chel cher de la mnos /.

[46] Śāstrī 1927: 1-12, 密教聖典研究会 1988: 10-37, Mathes 2015: 323-331.

[47] Śāstrī 1927: 45, 密教聖典研究会 1991: 68-71, Mathes 2015: 433-436.

[48] Śāstrī 1927: 44, 密教聖典研究会 1990: 52-55, Mathes 2015: 427-431.

なわれない」と言うので，「あなたを損なわなくても，他の者を損なう」と言い，追放した．「違反者が門を出るのは相応しくない」と言い，壁を通り抜けていった[49].

ここでは, Dīpaṃkaraśrījñāna が師である Advayavajra をヴィクラマシーラ僧院から追放した物語が述べられている．ただし，ここでは Avadhūtipa ではなく，Maitrīpa と呼ばれており，Advayavajra の著作が言及されている．このことから，Maitrīpa は Advayavajra の別称とされていたことが確認できる．この挿話に続いて，彼自身がこの追放に対してどのように感じていたのかが述べられている．

尊者の心に「良かったのか，良くなかったのか」と考えてから，その夜にターラーに供物を捧げ, 賞讃をして, 尋ねたことで, 尊者が僧坊で寝ていると「息子よ, 良くないことである」という声が三度生じた. 外に行っても何も見えず, 再び中に戻って尊に尋ねると，ターラーが「安楽を享受する比丘の中で菩提を起こした一人の菩薩が Maitrīpa である．菩薩に対して罪をなすならば，異熟はとても大きい」と述べられた．尊者は，これに対する異熟はどのように生じるのですか」と尋ねると，須弥山を三周する大きな有情に生まれてから，種々の鳥の餌になる」と述べられた．「では，そのために何が有益か」と尋ねると，「北に行って大乗の法を流布すれば有益である．毎日，小塔を七個作れば有益である」と述べられ，その目的でチベットに入ろうと思った，と述べられている[50].

---

[49] Eimer 1979, 2. Teil, p. 139: khyad par du mnga' bdag mai tri pa bya ba de de na bzhugs pas / khong gi lta ba spyod pa 'bras bug sum ga la bla ma sha nti pas skyon bkal nas sgo glad la bris so // mai tri pa khong gis kyang lta ba nyes sel bya ba dang / rmi lam nyes par bstan par bya ba dang / sgyu ma nyes par bstan pa bya ba'i bstan bcos brtsams nas skyon bsal skad / mai tri pa de rnam 'byor ma la thugs dam mdzad pas / rnal 'byor ma'i dam rdzas kyi chang cig sbas yod pa btsun pa cig gis mthong nas dge 'dun la bshad / dge 'dun rnams na re / nyams pa gnas nas 'byin dgos zer nas bskrad pas bzhud du ma gnang bar 'dzin la mi gnod kyi – byas pas / khyod la mi gnod kyang gzhan la gnod zer nas bton pas nyams pa sgo la 'gror mi rung gsungs nas rtsig pa la thal gyis bzhud do //. Cf. 静 2015: 145.

[50] Eimer 1979, 2. Teil, p. 140: jo bo'i thugs dngos la legs sam snyam nas de'i nub mo sgrol ma la mchod pa phul bstod pa byas gsol ba btab pas / jo bob rang khang na gnyid bag tsam gzims pa'i snang ba la bu ma legs so bya ba'i sgra lan gsum byung / phyir phyin nas bltas pas ci yang ma gzigs / yang nang du byon nas lha la gsol ba btab pas jo mo sgrol ma'i zhal nas dge slong ci bde ba bton pa'i gseb na sems dang po bskyed pa'i byang chub sems dpa' gcig bzhugs pa de mnga' bdag mai tri pa yin / byang chub sems dpa' la sdig bsags na rnam smin shin tu che'o gsung / jo bos 'di la rnam smin ji lta bu zhig 'byin zhus pas / ri rab la lan gsum 'khor ba'i sems can chen po – cig tu skyes nas bya sna tshogs kyis za bar byed gsung / 'o na de la ci phan zhus pas byang phyogs su phyin nas theg pa chen po'i chos dar bar byas pa phan / nyi ma re la sa tstsha bdun bdun btab na phan gsungs te /. Cf. 林 1999: 6-7, 静 2015: 145.

Dīpaṃkaraśrījñāna は，この追放を後悔しており，ターラー尊に行為の是非を尋ねている．ただし，その答えは，否定的なものであり，それを打ち消す在り方も尋ねている．後悔の時点で，その是非は明らかな訳だが，この挿話は，その答えであるチベット行きの動機付けを示すものである．すなわち，この記述は，Advayavajra との関係を示す一例として述べられたものではなく，Dīpaṃkaraśrījñāna のチベット行きの動機の一つとして Advayavajra の僧院追放が語られている点に注意する必要がある．

最後の言及は，Dīpaṃkaraśrījñāna のガリでの活動を述べる箇所において見ることができる．

> その時，尊者は，「Nāropa の弟子のパンディタで「Jñānakara」と言われる聖者の Avadhūtipa に，軌範師 Nāgārjuna の教義に意趣の法があるので，その時にお願いせず，残念だった」と述べている [51].

ここでは，Advayavajra が Nāropa の弟子であり，Jñānakara という別名でも知られていたことが伝えられている．また，Dīpaṃkaraśrījñāna との関係は，教えを受ける機会を持つことは可能であったが，Nāgārjuna に対する独自の解釈を受けることはなかったとされる．

まとめ

以上のことから確認できたことをまとめてみる．

まず，Dīpaṃkaraśrījñāna の著書における Avadhūtipa に対する言及は，*Bodhimārgadīpapañjikā* に 4 度，*Madhyamakopadeśaratnakaraṇḍoghāṭa* に 4 度，*Ekasmṛtyupadeśa* に 2 度，*Vajrāsanavajragīti* と *Sūtrasamuccayasañcayārtha* に 1 度見られる．*Bodhimārgadīpapañjikā* では，四灌頂に関するコンテキストにおいて言及されており，特に秘密灌頂と般若智灌頂の禁止について Avadhūtipa から説明を受けていたことが確認できる．また，Advayavajra の著作については，*Sekanirdeśa* と *Kudṛṣṭinirghātana* の引用を見ることができるが，前者は典拠を確認できない一方で，後者については，Dīpaṃkaraśrījñāna は Advayavajra の著作と認識していなかったこ

[51] Eimer 1979, 2. Teil, p. 231: de'i dus su jo bo'i zhal nas / a ba dhū tī pa nā ro pa'i slob ma pa ṇḍi ta dznyā na ka ra zhes bya ba skyes bu dam pa cig la slob dpon klu sgrub lugs la dngos pa'i chos shig yod pas / da zhu ma byung ste yid la gcags so gsung /.

とが確認できる．このことから，その他の言及も含め，Dīpaṃkaraśrījñāna の著作における引用は，Advayavajra の著作ではなく，直接に受けた教示からのものである可能性がある．

伝記においては，教えの相承の箇所において最も多く言及されている．ここでは Avadhūtipa として言及されるものの，両者の実際の関係を必ずしも示してはいない．両者の師弟関係についての言及は，成就者の師とされ，彼に仕えたことも述べられている．このことから，両者の間に師弟関係があったことが伝えられていたことが確認できる．また，両者の関係の具体的内容としては，僧院追放の挿話があるが，ここでは Maitrīpa として言及されている．その内容も，Dīpaṃkaraśrījñāna チベット行きのモチーフの一つとして語られたものであり，両者の関係を積極的に述べたものではない．このことから，伝記資料において言及される Avadhūtipa と Maitrīpa は同一人物ではない可能性もあり，その場合は，Avadhūtipa は Advayavajra と別人と認識されていたことになる．また，同一人物だとしても，別名を意図的に使い分けていた可能性がある．

また，著作における言及と伝記における言及を比べると，Advayavajra に対する記述の温度差を感じてしまう．すなわち，両者の師弟関係は確認できるものの，伝記では師に対するネガティヴなイメージも伝えている．ただし，それは間接的に述べられる話題でしかなく，両者の関係の本質を伝えるものではないことを認識すべきである．

参考文献

Deb ther sgon po (gZhon nu dpal, 1395-1481)

1984 『青史』四川民族出版社.

Chattopadhyaya, Alaka

1967 *Atīśa and Tibe*t, Calcutta: Distributors Indian Studies, Past and Present.

Eimer, Helmut

1977 *Berichte über das Leben des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

1979 *rNam thar rgyas pa: Materialien zu einer Biographie des Atiśa (Dīpaṃkaraśrījñāna)*. 2 vols. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

Hadano, Hakuyu

1986 “A Historical Study in the Problems Concerning the Diffusion of Tantric Buddhism in India; Advayavajra, alias Mnga’ bdag Maitrī-pa,” 『チベット・

インド学集成』3, 法蔵館: 166-181.

Isaacson, Harunaga and Francesco Sferra

2014 *The Sekanirdeśa of Maitreyanātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśa-pañjikā of Rāmapāla.* Napoli: Università degli studi di Napoli "l'orientale."

Martin, Dan

2011. *Tibskrit Philology*. https://dl.dropboxusercontent.com/u/37359227/ Tibskrit% 202011. pdf

Mathes, Klaus-Dieter

2015 *A Fine Blend of Mahāmudrā and Madhyamaka.* Wien: Verlag der österreichischen Akademie der Wissenschaften.

Mochizuki, Kaie

2015 "On the *Ekasmṛtyupadeśa* of Dīpaṃkaraśrījñāna and his view on Nāgārjuna" 『印度学仏教学研究』63-3: 213-220.

2016 "Dīpaṃkaraśrījñāna's activity at the Vikramaśīla Monastery in Relation with the Pāla Dynasty" 『東洋文化』96: 63-80.

Roerich, George N.

1949 *The Blue Annals*, Calcutta: Royal Asiatic Society of Bengal.

Śāstrī, Haraprasāda

1927 *Advayavajra-saṁgraha*, Baroda : Oriental Institute.

Szántó, Péter Dániel

2013. "Minor Vajrayāna Texts II: A New Manuscript of the Gurupañcāśikā." in: N. Mirnig, P. Szántó & M. Williams, eds., *Puṣpikā: Proceedings of the International Indology Graduate Research Symposium (September 2009, Oxford)*, Oxford: Oxbow Publishers: 443-450.

Tatz, Mark

1985 "Maitī-pa and Atiśa," *Proceeding of the 4th International Seminar on Tibetan Studies*, München: Kommission für zentralasiatische Studien bayerische Akademie der Wissenschaften: 473-481.

1987 "The Life of the Siddhi-Philosopher Maitrīgupta," *Journal of the American Oriental Society*, 107: 695-711.

Tucci, Giuseppe

1930 "Animadversiones Indicae," *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, N.S. 26: 125-160.

1932 “Two hymns of the Catuḥstava of Nāgārjuna,” *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1932: 309-325.

Wallis, Glenn

2003 “Advayavajra’s Instructions on the Ādikarma,” *Pacific World: Journal of the Institute of Buddhist Studies*, Third Series 5: 203-230.

宇井伯寿

1963 「ADVAYAVAJRA TATTVARATNĀVALĪ」『大乗仏典の研究』岩波書店: 1-52.

奥山直司

1991 「ある聖者伝説:アドヴァヤヴァジュラ伝〈Amanasikāre Yathāśurutakrama〉に見える修行者像」『インド思想における人間観』平楽寺書店: 463-485.

静春樹

2015 「マイトリパの僧院追放とアティシャ」『高野山大学密教文化研究所紀要』28: 148-127.

武邑 尚邦

1951 「Advayavajra-saṁgraha について」『仏教学研究』5: 74-75.

羽田野伯猷

1986 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成』1, 法蔵館: 46-191.

林慶仁

1999 「Advayavajra と Sh’anti pa : Ratnākaraśānti 二人説」『日本西蔵学会々報』44: 3-13.

松本恒爾

2016 「顕教と密教—Advayavajra とその弟子たちを中心として—」『現代密教』27: 161-175.

密教聖典研究会

1988 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳（一)」『大正大学綜合佛教研究所年報』10: 178-234.

1989 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳（二)」『大正大学綜合佛教研究所年報』11: 200-259.

1990 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳（三)」『大正大学綜合佛教研究所年報』12: 282-316.

1991 「アドヴァヤヴァジュラ著作集 : 梵文テキスト・和訳（四)」『大正大学綜合佛教研究所年報』13: 242-291.

宮崎泉

2007　「『中観優婆提舎開宝篋』テキスト・訳注」『京都大学文学部研究紀要』46: 1-126.

望月海慧

2008　「ディーパンカラシュリージュニャーナに帰される『金剛座金剛歌』について」『坂輪宣敬博士古希記念論文集　仏教文化の諸相』山喜房佛書林: 159-183.

2013　「Dīpaṃkaraśrījñāna が説く根本過罪について」*Acta Tibetica et Buddhica* 6: 61-77.

2014　「ヴィクラマシーラ僧院における Dīpaṃkaraśrījñāna」『奥田聖應先生頌寿記念　インド学仏教学論集』佼成出版社: 860-870.

2015　『全訳アティシャ　菩提道灯論』起心書房.

2016　『ディーパンカラシュリージュニャーナ研究』博士学位請求論文, 立正大学.

森口　光俊

1996　「Advayavajra は尊称 Anupamavajra か」『智山学報』59: 1-29.

頼富　本宏

1977　「Advayavajra 研究(一)」『密教学』13/14: 139-156.

1990　『密教仏の研究』法蔵館.

（平成 28 年度科学研究費「密教思想と他の仏教思想との関係性―ヴィクラマシーラ寺院の学僧の著作群を中心に―」［基盤研究(B), 26284008, 代表: 久間泰賢］による研究成果.）